慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	認知不協和理論と自己認知理論をめぐる論争
Sub Title	On the controversy between cognitive dissonance and self-perception theories
Author	萩原, 滋(Hagiwara, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1976
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.16 (1976.) ,p.79- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000016-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

認知不協和理論と自己認知理論をめぐる論争

On the controversy between cognitive dissonance and self-perception theories

萩　原　　滋

Shigeru Hagiwara

近年の社会心理学の動向を特徴づける理論的枠組みのひとして認知的一貫性の諸理論が挙げられる。就中 Leon Festinger の認知不協和理論は広範囲の現象に適用可能であり，多岐に渡る領域での実験を数多く生み出している。認知不協和の概念は甚だ曖昧であり，その解釈に関する論議は続いているが (Abelson, 1968; Aronson, 1968, 1969)，ここではそれに言及せず，強制的承諾 (forced compliance) の研究に焦点を合わせて議論を進めていく。即ち，要請に応じて自分の態度，信念，感情に反するような行動をとった場合であり，「自分はXという信念をもつ」という認知と「not X という信念を披瀝するような行動をとった」という認知が不協和であると考えられる。認知不協和は人に緊張を引き起こす不快な状態として特徴づけられ，不協和を減少する方向へと働く力が仮定されている。態度に反する行動をとることに対し選択の余地が与えられなかったり (e.g., Pallak, Brock, & Kiesler, 1967)，大きな報酬が与えられたり (e. g., Festinger & Carlsmith, 1959)，あるいは強い罰により脅かされたような場合 (e. g., Aronson & Carlsmith, 1962) には，それらが行動を正当化する理由となり不協和は小さくなる。しかし，そうした行動を正当化するだけの充分な理由に乏しい時には不協和は大きく，それを減殺する為に自分の行動と矛盾しないように態度を変容することが起きる。つまり，態度に反する行動をとった場合，それを正当化する理由の充分にある時よりもそうした理由の乏しい時に行動に合致するような型での態度変容が生じやすいというわけであり，これは「不充分な正当化のパラダイム(insufficient justification paradigm)」と呼ばれている。

以後の議論をわかりやすくする為，ここで Festinger and Carlsmith (1959) の実験を例示する。この実験の被験者は単調で退屈な作業に従事した後，実験者から偽の実験目的を明かされ，次の被験者に実験の作業はおもしろいと告げるよう要請される。その際，被験者に対して1ドルの報酬が支払われる条件と 20 ドルが支払われる条件が設けられた。要請に応じた被験者は，待合室にいる次の被験者（実際はサクラ）に作業はおもしろいと説得した後，事務室で実験作業の評価を含む様々な質問に答えた。その結果，20ドルを支払われた被験者に比べ1ドルの報酬を得た被験者の方が実験作業を実際におもしろいと評価し，同様の実験に再び参加する意志を示す傾向が認められた。退屈と思っている作業をおもしろいと他人に告げることにより不協和が生じるが，20ドルの報酬はそうした行動を正当化する理由となりえても，1ドルでは不充分であり，披瀝した行動に合致するよう態度を変容して不協和を減殺し，1ドル条件の被験者は作業はおもしろいと評価したと解釈されている[1]。

これに対し Daryl J. Bem は，認知不協和あるいは不協和減殺という動機的な状態や過程を考えることなく，認知不協和理論により解釈されてきた実験結果を説明できるとして自己認知理論を提唱する。人は自分の（外面にあらわれた）行動及びそれが生じた状況の観察から推測して自分自身の態度，感情，その他の内的状態を認知することがあるというのが Bem の基本的立場である。他者の内的状態を推測する為に観察者は，その人の行動及びその状況という外的手がかりに依拠せざるをえないわけであり，従って自分自身の内的手がかりが不分明なほど人は外部の観察者と同様の立場におかれると

している。

例えば Festinger and Carlsmith の実験結果を Bem は次のように解釈する (Bem, 1967a, 1972)。外部の観察者は 20 ドルを受けとり作業はおもしろいと告げた被験者の行動を報酬により制御されたとみなし，その行動から被験者の作業に対する態度を推測しないが，1ドルを得た被験者の報告の場合には，20ドルの時ほど報酬により制御された行動とは考えにくく，その報告が被験者の真の態度を反映するとみなしやすい。これと同様の推測過程は被験者自身にも適用するのであり，1ドル条件の被験者は大きな報酬を得ることなしに作業はおもしろいと告げた自分の行動の観察から内的状態を推測し，作業に対する自分の好意的態度を認知したのであり，それは不協和減殺の結果ではないとしている。自己認知理論によれば，自ら行動をとった後ではその対象についての以前の態度は不明瞭になり，態度変容を被験者は現象的に経験しないことになる。それに対し認知不協和理論は不協和減殺により態度変容が生じるとしているが，その過程を被験者が現象的に経験すると規定しているわけではなく，態度変容の意識を被験者がもたないとしても認知不協和理論が棄却されるわけではない。

この論文では，認知不協和理論と自己認知理論をめぐる今迄の論争を概観し，要約すると伴に，認知不協和現象を説明するものとして発展してきた自己認知理論の適用可能な領域を最後に検討してみたい。

1. Interpersonal Simulation の方法

内的手がかりが不分明なほど人は外部の観察者と機能的に類似した立場におかれるという上記の仮説を例証する為に Bem は Interpersonal Replication あるいは Interpersonal Simulation と呼ばれる方法を用いていくつかの実験を行なっている (Bem, 1965, 1967a)。これらの実験では，認知不協和理論の枠組みで行われた過去の実験 (Brehm & Crocker, 1962; Cohen, 1962; Festinger & Carlsmith, 1959 など）の詳細を被験者に示し，もとの実験の被験者の最終反応（強制的承諾後の態度）を推測させ，こうした観察者役の被験者の推測がもとの実験結果とかなり一致することを確かめている。例えば Festinger and Carlsmith の実験の Interpersonal Simulation の被験者は，もとの実験の被験者の行なった作業の内容，その後の実験手続き，及びその被験者の行動を細かく記述したテープを聞かされ，Festinger and Carlsmith の被験者がどのように最終質問に答えたかを推測させられたが，20ドルの報酬を受けとった被験者より1ドルを支払われた被験者の方が実験作業をよりおもしろいと評価すると正しく見通している。

認知知不協和実験の被験者の反応を外部の観察者が正しく推測することを示し，Bem は被験者もその観察者と同様に外的手がかりから内的状態を推測していることを例証しようとしたわけであるが，Bem の Interpersonal Simulation の方法に対してはいくつかの批判が出ている (Dillehay & Clayton, 1970; Elms, 1967; Jones, Linder, Kiesler, Zanna, & Brehm, 1968; Mills, 1967; Piliavin, Piliavin, Loewenton, McCauley, & Hammond, 1969)。

Bem の Interpersonal Simulation の方法では，もとの実験の被験者が要請を承諾する以前に当該の対象に対してもっていた態度（初期態度）を観察者役の被験者に呈示していないが，批判の多くはこの点に集中している。つまり，少ない報酬で要請を承諾した被験者は，大きな報酬を支払われた被験者よりも実験者の要請内容に近い初期態度をもっていたと観察者役の被験者に認知されたことにより Bem の結果は得られたのであり，認知不協和実験の内容を正しく再現していないという批判である。強制的承諾の実験では報酬の大きさ（あるいは他の正当化の理由の大きさ）に拘らず，殆どの被験者が要請に応ずることが重要なのであって，最初から要請内容に近い態度をもっていた被験者のみが少ない報酬で承諾したとすれば認知不協和の検証にはならないというわけである[2)]。Jones *et al.* (1968) 及び Piliavin *et al.* (1969) は，Bem の用いた不協和実験の記述による Interpersonal Simulation の場合には Bem の結果，即ちもとの実験結果を再現できるが，被験者の初期態度を記述に加えた場合には観察者はもとの不協和実験の結果を正しく推測できないと報告している。

こうした批判に対する Bem の再批判 (Bem, 1967b; 1968) の要旨は，実験者の要請に自ら応じた被験者には当該の対象に対する初期態度の認識は明らかではなく，自分の行動及びその状況から推測された態度が事前の態度を凌駕するので Interpersonal Simulation の記述には被験者の初期態度は加えられるべきではない，また初期態度を加えた記述による Interpersonal Simulation で，もとの実験結果を再現できなかったことこそがそれを証明しているというものである。

強制的承諾後には初期態度の認識はなくなることを例証する為，Bem and McConnell (1970) はある社会問題に関する被験者の態度とは逆の立場を擁護する議論をさ

せて態度変容を生じさせた後，その問題についての以前の態度を想起させるという方法を用いている。その結果は Bem の予測通りであり，被験者が想起した自分の初期態度は，実際の初期態度より事後の態度に近いものであった。しかし，初期態度を自分の行動と一致するように事後再生すること自体が不協和減殺の様式とも考えられる。

この点に関し Shaffer (1975) は，自分の態度と一致する方向の議論をして態度変容が生じた時には初期態度を被験者は正しく想起するが，自分と反対の立場を擁護して態度変容が生じた時には初期態度の想起は行動と一致する方向にゆがめられるという結果を報告し，強制的承諾後の初期態度の想起のゆがみは不協和減殺によると解釈している。同様の解釈は Ross and Shulman (1973) にもみられる。

一方，Bem and McConnell の実験の追試を行なった Chris and Woodyard (1973) は，当該の態度対象と深い関連をもたない被験者に限り，その結果を再現している。対象に深い関連をもつ被験者は，態度変容を示しても初期態度を正しく想起している。自分の態度とは逆の立場を擁護する場合，その問題に深く関わっている人の方が関連の薄い人よりも大きい不協和を経験すると考えられる。従って，事後再生のゆがみが不協和減殺によるとすれば，深い関わりをもつ被験者の方が初期態度をゆがめて想起することが予測されるが，Chris and Woodyard の結果は丁度逆になっている。しかし，むしろここで重要なのは，当該の態度対象に深く関わっている被験者は態度変容を示した後でも初期態度を正しく想起したという点であり，この結果は Bem の理論の適用範囲が被験者にとって関連の小さい態度対象に限定されることを示唆している。

以上の議論は，Interperesonal Simulation で用いる不協和実験の記述にその実験の被験者の初期態度を含めるべきか否かという問題に帰着する。この問題に対する明確な解答は与えられていないが，適当な記述を用いた場合に Interpersonal Simulation の被験者がもとの実験の被験者の反応を正しく推測できたとしても，それにより被験者が観察者と同様の心理的過程を経験していることが保証されるわけではなく，自己認知理論に対する直接的な支持は得られない。認知不協和理論と自己認知理論の妥当性を検証する上で，被験者の初期態度は確かに重要な変数ではあるが，Interpersonal Simulation の方法ではなく，もともとの強制的承諾実験で初期態度の salience を直接に操作した研究に議論を移していく。

2. 初期態度の salience の操作

強制的承諾実験で，それ以前の態度に反するような行動を披瀝した被験者が当該の対象についての最終態度を報告する事態を考えてみる。自己認知理論によれば，その時点では被験者には初期態度の認識は明らかでなく，最終態度は自分の行動及びその状況から推測されることになる。つまり，通常の強制的承諾実験では，初期態度は最終態度の推測のデータとして用いられないということになるが，実験的に操作して初期態度を salient にすれば，推測される態度は初期態度と大きく違わなくなることが予測される。これに対し認知不協和理論では，初期態度を salient にされることにより自分のとった行動との矛盾が強く認識され，不協和減殺による態度変容はむしろ増大することが予測される。こうした理論的根拠に基づき初期態度の salience を操作し，認知不協和理論と自己認知理論を対比しようとする実験がいくつか行われている。

Ross and Shulman (1973) は質問紙により様々な対象に関する被験者の（初期）態度を測定した後，その中の特定の論点を選択し被験者とは逆の立場を擁護するエッセイを書かせるという型の強制的承諾実験を行なったが，最終態度を測定する前に一部の被験者には以前に自分の回答した質問紙を渡してチェックさせるという方法により初期態度の salience の操作をとり入れている。その結果は，最終反応の前に自分の初期態度を salient にされた被験者の方がそうした操作を受けない被験者より幾分大きい態度変容を示すというものであり，認知不協和理論が支持されている[3]。

これと同様の実験を行なった Snyder and Ebbesen (1972) は，初期態度と共に態度に反する行動の salience の操作もとり入れている。結果は clear-cut ではないが，初期態度を salient にすることにより態度変容が減少する傾向が認められ，自己認知理論が部分的に支持されている。但し，自己認知理論では行動が salient にされ，しかも初期態度が salient でない時に，最終態度と初期態度の差が最大になることを予測するが，この結果には行動の salience の操作の効果はみられず，初期態度も行動も特に salient にされない通常の不協和実験の状況で最大の態度変容が生じている。認知不協和理論では，初期態度と行動のいずれかが salient にされた場合，特に両方とも salient にされた場合に不協和は最も顕著となり態度変容が増大することを予測するが，Snyder and Ebbesen の実験結果にはその傾向は全く認められてい

ない。但し，この実験では初期態度の測定後，当該の対象に関する自分の意見に考えをめぐらして頭の中でまとめあげろという教示により初期態度の salience を操作し，その後で態度に反するエッセイを書かせており，Ross and Shulman の実験結果との矛盾はこうした salience の操作の手続き上の違いに求めることができる。

このような実験結果の矛盾に言及しGreenwald(1975)は，実験により両理論の一方を棄却することは不可能であるという立場を表明している。Greenwald は操作上の棄却可能性 (operational disconfirmability) と概念上の棄却可能性 (conceptual disconfirmability) とを区別し，理論上の概念と実験手続きを結ぶ操作的定義の確立されていない理論では，予測に反する実験結果が得られても，実験手続きが妥当でないという解釈により理論的概念構想を棄却しないですませる可能性が大きいとしている。認知不協和，自己認知の両理論ともその概念の操作的定義は確立されておらず，操作上の棄却可能性はあっても概念上の棄却可能性はもたないというわけである。

確かに，標準的な手続きの確立されていない社会心理学の実験では概念の操作化の恣意性は免れえず，実験結果の一義的解釈は困難である。従って，実験による理論の検証では常識的判断の果す役割が大きくならざるをえない。態度と行動が矛盾する場合に態度を変容するという認知不協和理論の予測は，他者に観察された行動の拘束 (commitment) が大きいことを前提としており，初期態度を特に salient にすれば不協和は大きくなるとしても，同時に初期態度の拘束力も増加し態度変容が生じにくくなるとも考えられる。その場合には態度変容以外の不協和減殺の方法がとられる可能性がある。この意味で Snyder and Ebbesen の結果を認知不協和理論により解釈することは可能としても，Ross and Shulman の結果を自己認知理論により説明するのは難しい。通常の強制的承諾実験で，初期態度が最終態度の推測に影響を与えていないとは考えにくい。

3. 動機的概念としての認知不協和

認知不協和あるいは不協和減殺という曖昧な動機的概念を回避することをひとつの目的として Bem は自己認知理論を提唱したわけであるが，認知不協和の状態が緊張ないしは興奮を引き起こし，その後の行動を動機づけることを直接に示そうとする研究も行われている (Pallak, 1970; Pallack, Brock, & Kiesler 1967; Weick, 1964 など)。動因の強く働く状態では，良く学習された dominant な反応の生起が促進されるという命題 (e.g., Spence, Farber, & McFann, 1956 など) を援用し，最近の研究の多くは，認知不協和により単純作業は促進され，複雑作業は阻害されることを示し，不協和の状態が緊張あるいは興奮を生じさせることを例証しようとする方向へ進んでいる。

Waterman and Katkin (1967) は不協和により単純作業が促進されることのみを，また Waterman (1970) は複雑作業が阻害されることのみを確認しているが，Pallak and Pittman (1972) は両方を同時に確認している。この実験では，いくつかの単語の発音を何度もくり返すという退屈な仕事に従事することに対し選択の自由を与える条件と与えない条件とを設けて不協和の操作をした後，誤りをおかしやすい複雑作業と誤りの少ない単純作業とを被験者に行わせている。その結果，選択の与えられなかった被験者に比べ，退屈な仕事に従事することを選択し不協和の大きい被験者の誤反応は単純作業では減少し，複雑作業では増大する傾向を示した。さらに，単語の発音をくり返す仕事は研究上重要な意味をもつと被験者に告げ，退屈な仕事に従事することを正当化して不協和を減少させた場合には，作業結果に及ぼす不協和の効果が除去されることも確認している。

こうした実験結果は，概ね認知不協和の状態が緊張あるいは興奮を生じさせることを支持しているが，さらに不協和に伴なう態度変容がそうした緊張により仲介されることを Zanna and Cooper (1974) は別の方法により巧みに例証している。この実験は後述の misattribution の現象を利用し，認知不協和による緊張が別の原因(薬)により生じたと被験者に認知された場合には，通常の不協和効果が除去されることを確かめている。被験者はまず記憶に及ぼす種々の薬品の影響を調べるという偽の実験目的を告げられ，実際は何の効力もない偽薬をのまされる。その際，その薬が興奮作用をもつと説明されるグループ，鎮静作用をもつと説明されるグループ，及び副作用はないとされるグループが設けられる。そして薬の効果があらわれる迄の時間，別の実験を手伝うよう要請され，被験者は自分の態度に反するエッセイを書かされる。この時に選択の自由の与えられる条件と与えられない条件とが設けられ，不協和の操作が行われる。最後に当該の対象に関する態度測定が行われたが，薬の副作用はないと説明されたグループでは通常の不協和効果，即ち選択の与えられなかった被験者に比べてエッセイを書くことを選択した被験者はその内容に一致するよう態度

を変容する傾向が認められた。しかし，薬に興奮作用があるとされたグループでは不協和効果は完全に消滅し，それとは逆に鎮静作用があるとされたグループでは不協和効果が増大するという結果が生じている。薬に興奮作用があると信じた被験者は，認知不協和により生じた興奮をその薬に帰因し，興奮の真の原因である不協和を減殺する力が働かなくなるので態度変容が生じないと解釈されている。逆に，薬に鎮静作用があると信じた被験者は，薬が静めたはずの興奮を合わせた分だけ大きい緊張を認知不協和に帰因した為，通常より大きい態度変容が生じたというわけである。

他の原因により生じた興奮を認知不協和に誤って帰因した場合，不協和減殺に伴なう態度変容が増大するという報告は他にもある (Harris & Jellison, 1971; Mintz & Mills, 1971; Pittman, 1975)。

4. 自己認知理論の適用領域

認知不協和現象とされてきた実験結果を認知不協和理論に代って説明するものとして自己認知理論は発展してきたわけであるが，強制的承諾に関する以上の考察の内には自己認知理論を支持する根拠は乏しい。外的手がかりから内的状態を推測するのは，内的手がかりが不分明の時という留保条件がおかれているにも拘らず，自己認知理論の適用領域が拡大解釈されてきたきらいがある。自己認知理論の真価は，認知不協和理論により扱われてきた現象ではなく，それ以外の現象の内に求められるべきであろう。強制的承諾に限れば，当該の対象に関する態度が被験者の内に確立されていない場合に，行動から態度を推測する事態が生じると思われる (Chris & Woodyard, 1973 参照)。換言すれば，認知不協和理論は態度変容に焦点を合わせているが，自己認知理論は態度形成とする方がふさわしいような領域に限定されるべきであるということになる。

他者の行動，その結果(効果)，状況などに関する情報をもとに一般の人々がその行動の原因をどこに求めるかという視点から，観察者が社会的事象に因果的説明を与える過程の法則性を探究する帰因理論 (Attribution Theory) が最近めざましい発展を示している。帰因理論は，元来，他者の行動をその対象としていたわけであるが，自分自身の行動や身体・生理的状態の因果的説明にも拡張され (Kelly, 1967; Nisbett & Valins, 1971), Bem の自己認知理論は帰因理論の枠組みに拡張されつつある。それに伴ない，自己認知理論の新しい適用領域が開かれてきている。

①自分の態度に反するような行動ではなく態度と一致した行動をとるよう要請され，しかもそれに対して報酬が支払われるような状況では不協和が生じるとは考えにくく，認知不協和理論は明確な予測をもたない[4]。態度と一致した行動の場合には，態度や興味といった内的な要因により行動は充分正当化されるわけであるが，それに対し報酬といった外的な正当化の理由が付加されると，態度や興味に基づいた行動も外的状況に制御されたと被験者に認知されやすく，そうした行動及びその対象に対する好意的態度や興味が損われると自己認知理論は予測する。これは，不充分な正当化のパラダイムに対して「充分すぎる正当化のパラダイム (overjustification paradigm)」と呼ばれている。例えば Lepper, Greene, and Nisbett (1973) は，絵を描くことに興味を示す幼稚園児を集め，報酬を得る為に絵を描かすという実験的操作を行なったが，そうした報酬の与えられなかった子供に比べ，報酬を得る為に絵を描いた子供は，その後絵を描くことに対する興味を失なう傾向を示すという結果を報告している。もともとの興味の高い作業を行なうことに対し報酬などの外的な正当化の理由を与えると，報酬を得る為に作業をするという認知を生み，その後の興味が損われるという結果は別の状況でも確認されている (Deci, 1971, 1972; Greene & Lepper, 1974; Kruglanski, Friedman, & Zeevi, 1971; Kruglanski, Alon, & Lewis, 1972; Lepper & Greene, 1975)。但し，この現象は，報酬の支払いを伴なうという社会的規範のない作業 (Kruglanski, Riter, Amitai, Margolin, Shabtai, & Zaksh, 1975; Staw, Calder, & Hess, 1975), 及びもともとの興味が充分に高い作業 (Calder & Staw, 1975; Kruglanski, Riter, Arazi, Agassi, Monteqio, Peri, & Peretz, 1975) に限定されることがその後明らかにされている。

②大部分の人々が承諾するような小さな依頼に応じた人は，その後誰もが承諾するとは限らない大きな依頼に対しても同意する割合が高くなる傾向を Freedman and Fraser (1966) は示し，foot-in-the-door 現象と名付けたが，最近これに類似した現象を自己認知理論の枠組みで解釈しようとする研究が行われている (Lepper, 1973; Snyder & Cunningham, 1975; Uranowitz, 1975)。即ち，最初の依頼に自ら応じた行動の観察から，自分は他人の要請に対して寛大であるといった自己概念を形成した為，それ以後の依頼に応じやすくなるという解釈である。例えば Lepper (1973) は子供にいくつかの玩具を与え，実験者の外出中に特定の玩具と遊ぶことを禁じ，

その言いつけを守らせた後，別の状況で実験者の言いつけに従い子供が正直に振舞うかどうかを観察している。玩具と遊ぶことを禁止する際，強い罰で脅かす条件と弱い罰しか用いない条件とが設けられている。弱い罰による脅しで遊ぶことを禁じられ言いつけを守った子供は別の状況でも正直に振舞うが，最初に強い脅しにより言いつけに従った子供は，そうした脅しのない別の状況では不正直な行動を示すという結果が出ている。弱い脅しの条件の子供は，言いつけを守った自分の行動を脅しにより制御されたとは認知せず，自分は大人の言いつけを守る良い子だといった自己概念を発達させ，その為に別の状況でも正直に振舞うようになると解釈されている。逆に，強い脅しにより魅力的な玩具と遊ぶことをやめた子供は，その行動を脅しにより制御されたと認知し，そうした脅しのない状況では言いつけに従わなくなるというわけである。こうした場合には，自分の行動から対象に対する態度ではなく，自己概念ともいうべきより永続的なdisposition を推測したことになる。

③さらに，帰因理論の枠組みに拡張された自己認知理論の新しい適用領域としては，いわゆる misattribution の現象が挙げられる。即ち，自分の行動や身体・生理的状態をその真の原因ではなく別の事象に誤って帰因したり (Davison & Valins, 1969; Nisbett & Schachter, 1966; Ross, Rodin, & Zimbardo, 1969 など)，生理的状態などに関する偽のフィードバックから自分の態度や感情を推測したりする (Barefood & Straub, 1971, Taylor, 1975; Valins, 1969 など) 現象である。最近では misattribution の現象を臨床場面に応用する試みもあり (Kellogg & Baron, 1975; Singerman, Borkovec, & Baron, 1975; Storms & Nisbett, 1970, Valins & Ray, 1967)，数多くの実験が行われ，新たな論議を引き起こしている。その紹介は別の機会に譲るが，前述の Zanna and Cooper (1974) の実験は misattribution の現象を利用し，認知不協和理論を支持する証拠を提出している点で注目に値する。

認知不協和理論に代るものとして出発した Bem の自己認知理論は，いわゆる認知不協和現象以外の適用領域を獲得すると伴に，当初の行動主義的色彩は弱められている。外面にあらわれた行動だけではなく，身体・生理的な状態やそれに関する外部からの情報も態度や感情などの内的状態の推測のデータとして扱われるようになっている。こうした新しい適用領域に関しても自己認知理論以外の解釈は可能であり，また理論と呼ぶにふさわしい体系が整っているわけでもないが，因果関係の認知という帰因理論的アプローチは今迄充分にとりあげられておらず，今後の研究を方向づける上で大きな役割を果すことが期待されている。

註

1) この実験の手続きで特に重要なのは，作業はおもしろいとサクラに告げることに対し選択の余地が被験者に与えられていることと，サクラが被験者に説得される演技をしたことの二点である。態度に反する行動をとることに対し選択の余地の与えられない場合には，報酬の大きいほど態度変容は大きくなり，選択の余地が示された時にのみ（註 2 参照）不協和効果が生じている (Holmes & Strickland, 1970; Linder, Cooper, & Jones, 1967; Sherman, 1970)。また相手が自分の行動により影響を受けないと被験者が信じた場合には，不協和効果は生じていない (Collins & Hoyt, 1972; Cooper & Worchel, 1970; Nel, Helmreich, & Aronson, 1969)。Festinger and Carlsmith の実験手続きを用い，上記の二変数を同時に操作した Calder, Ross, and Insko (1973) は，被験者が実験者の要請に対し選択の余地を与えられ，サクラが説得される条件でのみ Festinger and Carlsmith の実験結果を再現している。

2) 強制的承諾の実験で実験者の要請に応じることを強制されたと被験者が思った場合には，それが態度に反する行動を正当化する理由となり認知不協和は成立しない。要請に応じることは自由であると告げられても，報酬が与えられなくても実験に参加した被験者が実験者の要請を拒むことは稀である。さらに重要なのは，実際には殆どの被験者が要請を承諾する状況でも，当の被験者は選択の自由を与えられ自ら実験者の要請に応じて行動することを選んだと認知している点である。こうした現象は illusion of freedom (Kelly, 1967) あるいは illusion of choice (Abelson, 1974) と呼ばれ，認知不協和実験の前提となっている。

3) のどを渇かしている被験者に 5 ドルあるいは 20 ドルの報酬を支払い，水を飲まないでいることの必要な実験に参加することを要請するという型の強制的承諾実験で最初の渇きの状態を操作し，Green (1974) は認知不協和理論を支持する結果を報告している。

4) Nuttin (1966) は Festinger and Carlsmith の実験手続きに加えて，退屈な作業を退屈と次の被験者に告げる条件を設けている。この条件でも，大きな報酬を与えられた被験者より小さな報酬を得た被験者の方が，事後，作業をおもしろいと評価するという結果が得られており，Nuttin はそれを認知不協和理論の枠組みで解釈している。即ち，自分の意見と一致した報告を行なうだけで大きな報酬を得ること自体が不協和を生じさせ，それを減殺する為に大きな報酬を得た被験者は，作業はその報酬に値するほどひどく退屈であると認知したというわけであ

る。但し，この解釈に関しては，認知不協和論者の意見の一致をみていない (Elms, 1967 参照)。

引 用 文 献

Abelson, R. P. (1968) Psychological implication. In R. P. Abelson *et al.* (Eds.), *Theories of cognitive cosistency: a sourcebook.* Chicago: Rand McNally.

Abelson, R. P. (1974) Social psychology's rational man. In G. W. Mortimore and S. I. Benn (Eds.), *The concept of rationality in the social sciences.* Routledge, Kegan & Paul.

Aronson, E. (1968) Dissonance theory: progress and problems. In R. P. Abelson *et. el.* (Eds.), *Theories of cognitive consistency: a sourcebook.* Chicago: Rand McNally.

Aronson, E. (1969) The theory of cognitive dissonance: a current perspective. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 4. New York: Acapemic Press.

Aronson, E., & Carlsmith, J. M. (1963) Effect of the severity of threat on the devaluation of forbidden behavior. *J. abnorm. soc Psychol.* **66**, 584-588.

Barefoot, J. C., & Straub, R. B. (1971) Opportunity for information search and the effect of false heart-rate feedback. *J. P. S. P.*, **17**, 154-157.

Bem, D. J (1965) An experimental analysis of self-perception. *J. E. S. P.* **1**, 199-218.

Bem, D. J. (1967) Self-perception: an alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena. *Psychol. Rev.*, **74**, 183-200. (a)

Bem, D. J. (1967) Reply to Judson Mills. *Psychol. Rev.*, **74**, 536-537. (b)

Bem, D. J. (1968) The epistemological status of interpersonal simulations: a reply to Jones, Linder, Kiesler, Zanna, and Brehm. *J. E. S. P.*, **4**, 270-274.

Bem, D. J. (1972) Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, vol. 6. New York: Academic Press.

Bem, D. J., & McConnell, H. K. (1970) Testing the self-perception explanation of dissonance phenomena: on the salience of premanipulation attitudes. *J. P. S. P.*, **14**, 23-31.

Brehm, J. W., & Crocker, J. C. (1962) An experiment on hunger. In J. W. Brehm and A. R. Cohen (Eds.), *Exporations in cognitive dissonance.* New York: Wiley. Pp. 133-136.

Calder, B. J., Ross, M., & Insko, C. A. (1973) Attitude change and attitude attribution: effects of incentive, choice, and consequences. *J. P. S. P.*, **25** 84-99.

Calder, B. J., & Staw, B. M. (1975) Self-perception of intrinsic and extrinsic motivation. *J. P. S. P.*, **31**, 599-605.

Chris, S. A., & Woodyard, H. D. (1973) Self-perception and characteristics of premaniputon attitudes: a test of Bem's theory. *Memory & Cognition*, **1**, 229-235.

Cohen, A. R. (1962) An experiment on small rewards for discrepant compliance and attitude change. In J. W. Brehm and A. R. Cohen (Eds.), *Explorations in cognitive dissonance.* New York: Wiley. Pp. 73-78.

Collins, B. E., & Hoyt, M. F. (1972) Personal responsibility for consequences: an integration and extension of the "forced compliance" literature. *J. E. S. P.*, **8**, 558-593.

Cooper, J., & Worchel, S. (1970) Role of undesired consequences in arousing cognitive dissonance. *J. P. S. P.*, **16**, 199-206.

Davison, G. C., & Valins, S. (1969) Maintenance of self-attributed and drug-attributed behavioral cange. *J. P. S. P.*, **11**, 25-33.

Deci, E. L. (1971) Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *J. P. S. P.*, **18**, 105-115.

Deci, E. L. (1972) Intrinsic motivation, extrinsic reinforcement, and inequity. *J. P. S. P.*, **22**, 113-120.

Dillehay, R, C., & Clayton, M. L. (1970) Forced-compliance studies, cognitive dissonance, and self-perception theory. *J. E. S. P.*, **6**, 458-465.

Elms, A. C. (1967) Role playing, incentive, and dissonance. *Psycol. Bull.*, **68**, 132-148.

Festinger, L., & Carlsmith, J. M. (1959) Cognitive consequences of forced compliance. *J. anorm. soc. Psychol.*, **58**, 203-210.

Freedman, J. L., & Fraser, S. C. (1966) Compliance without pressure: the foot-in-the-door technique. *J. P. S. P.*, **4**, 195-202.

Green, D. (1974) Dissonance and self-perception analyses of "forced compliance": when two theories make competing predictions. *J. P. S. P.*, **29**, 819-828.

Greene D., & Lepper, M. R. (1974) Effects of extrinsic rewards on children's subseqent intrinsic interest. *Child Develop.*, **45**, 1141-1145.

Greenwald, A. G. (1975) On the inconclussiveness of "crusial" cognitive tests of dissonance versus self-perception theories. *J. E. S. P.*, **11**, 490-499.

Harris, V. A., & Jellison, J. M. (1971) Fear-arousing communication, false physiological feedback, and the acceptance of recommendations. *J. E. S. P.*, **7**, 269-279.

Holmes, J. G., & Strickland, L. H. (1970) Choice freedom and confirmation of expectancy as determinants of attitude change. *J. P. S. P.*, **14**, 39-45.

Jones, R. A., Linder, D. E., Kiesler, C. A., Zanna, M., & Brehm, J. W. (1968) Internal states or external stimuli: observers' attitude judgments and the dissonance-theory—self-persuasion controversy. *J. E. S. P.*, **4**, 247-269.

Kellog, R., & Baron, R. S. (1975) Attribution theory, insomnia and the revers placebo effect: a reversal of Storms and Nisbett's findings. *J.P.S.P.*, **32**, 231-236.

Kelly, H. H. (1967) Attribution theory in social psychology. In D. Levine (Ed.), *Nebraska symposium on motivation.* University of Nebraska Press.

Kruglanski, A. W., Alon, S., & Lewis, T. (1972) Retrospective misattribution and task enjoyment. *J.E.S.P.*, 8, 493-501.

Kruglanski, A. W., Friedman, I., & Zeevi, G. (1971) The effects of extrinsic incentive on some qualitative aspects of task performance. *J. Pers.*, **39**, 606-617.

Kruglanski, A. W., Riter, A., Amitai, A., Margolin, B., Shabtai, L., & Zaksh, D. (1975) Can money enhance intrinsic motivation?: a test of the content-consequence hypothesis. *J. P. S. P.*, **31**, 744-750.

Kruglanski, A. W., Riter, A., Arazi, D., Agassi, R., Monteqio, J., Peri, I., & Peretz, M. (1975) Effects of task-intrinsic rewards upon extrinsic and intrinsic motivation. *J. P. S. P.*, **31**, 699-705.

Lepper, M. R. (1973) Dissonance, self-perception, and honesty in children, *J. P. S. P.*, **25**, 65-74.

Lepper, M. R., & Greene, D. (1975) Turning play into work: effects of adult surveillance and extrinsic rewards on children's intrinsic motivation. *J. P. S. P.*, **31**, 479-486.

Lepper, M. R., Green, D., & Nisbett, R. E. (1973) Undermining children's intrinsic interest with extrinsic reward: a test of the "overjustification" hypothesis. *J. P. S. P.*, **28**, 129-137.

Linder, D. E., Cooper, J., & Jones, E. E. (1967) Decision freedom as a determinant of the role of incentive magnitude in attitude change. *J. P. S. P.*, **6**, 245-254.

Mills, J. (1967) Comment on Bem's "Self-perception: an alternative interpretation of cognitive dissonance phenomena" *Psychol. Rev.*, **74**, 535.

Mintz, P. M., & Mills, J. (1971) Effects of arousal and information about its source upon attitude change. *J. E. S. P.*, **7**, 561-570.

Nel. E., Helmreich, R., & Aronson, E. (1969) Opinion change in the advocate as a function of the persuasibility of his audience: a clarification of the meaning of dissonance. *J. P. S. P.*, **12**, 117-124.

Nisbett, R. E., & Schachter, S. (1966) Cognitive manipulation of pain. *J. E. S. P.*, **2**, 227-236.

Nisbett, R. E., & Valins, S. (1971) Perceiving the causes of one's own behavior. In E. E. Jones *et al.*, *Attribution: perceiving the causes of behavior.* Morristown, N. J.: General Learning Press.

Nuttin, J. M. Jr. (1966) Attitude change after rewarded dissonant and consonant "forced compliance". *International Journal of Psychol.*, **1**, 39-57.

Pallak, M. S. (1970) Effects of expected shock and relevant or irrelevant dissonance on incidental retention. *J. P. S. P.*, **14**, 271-280.

Pallak, M. S., Brock, T. C., & Kiesler, C. A. (1967) Dissonance arousal and task performance in an incidental verbal learning paradigm. *J. P. S. P.*, **7**, 11-20.

Pallak, M. S., & Pittman, T. S. (1972) General motivational effects of dissonance arousal. *J. P. S. P.*, **21**, 349-358.

Piliavin, J. A., Piliavin, I. M., Loewenton, E. P., McCauley, C., & Hammond, P. (1969) On observers' reproductions of dissonance effects: the right answers for the worng reasons? *J. P. S. P.*, **13**, 98-106.

Pittman, T. S. (1975) Attribution of arousal as a mediator in dissonance reduction. *J. E. S. P.*, **11**, 53-63.

Ross, L., Rodin, J., & Zimbardo, P. G. (1969) Toward an attribution therapy: the reduction of fear through induced cognitive-emotional misattribution. *J. P. S. P.*, **12**, 279-288.

Ross, M., & Shulman, R. F. (1973) Increasing the salience of initial attitudes: dissonance versus self-perception theory. *J. P. S. P.*, **28**, 138-144.

Shaffer, D. R. (1975) Some effects of consonant and dissonant attitudinal advocacy on initial attitude salience and attitude change. *J. P. S. P.*, **32**, 160-168.

Sherman, S. (1970) Effects of choice and incentive on attitude change in a discrepant behavior situation. *J. P. S. P.*, **15**, 245-252.

Singerman, K. J., Borkovec, T. D., & Baron, R. S. (1975) Failure of "misattribution therapy" manipulation with a clinically relevant target behavior. *Behavior Therapy*, in press.

Snyder, M., & Cunningham, M. R. (1975) To comply or not comply: testing the self-perception explanation of the "foot-in-the-door" phenomenon. *J. P. S. P.*, **31**, 64-67.

Snyder, M., & Ebbesen, E. B. (1972) Dissonance awareness: a test of dissonance theory versus self-perception theory. *J. E. S. P.*, **8**, 502-517.

Spence, K. W., Farber, I. E., & McFann, H. H. (1956) The relation of anxiety (drive) level to performance in competitional paired-associates learning. *J. exp. Psycol.*, **52**, 296-305.

Staw, B. M., Calder, B. J., & Hess, R. K. (1975) *Intrinsic motivation and norms about payment.* Unpublished manuscript, University of Illinois at Urbana-Champaign.

Storms, M. D., & Nisbett, R. E. (1970) Insomnia and the attribution process. *J. P. S. P.*, **16**, 319-328.

Taylor, S. E. (1975) On inferring one's attitudes from one's behavior: some delimiting conditions. *J. P. S. P.*, **31**, 126-131.

Uranowitz, S. W. (1975) Helping and self-attributions: a field experiment. *J. P. S. P.*, **31**, 852-854.

Valins, S. (1966) Cognitive effects of false heart-rate feedback. *J. P. S. P.*, **4**, 400-408.

Valins, S., & Ray. A. A. (1967) Effects of cognitive desensitization on avoidance behavior. *J. P. S. P.*, **7**, 345-350.

Waterman, C. K. (1969) The facilitating and interfering effects of cognitive dissonance on simple and complex paired associates learning tasks, *J. E. S. P.*, **5**, 31-42.

Waterman, C. K., & Katkin, E. S. (1967) Energizing (dynamogenic) effect of cognitive dissonance on task performance. *J. P. S. P.*, **6**, 126-131.

Weick, K. E. (1964) Reduction of cognitive dissonace through task enhancement and effort expenditure. *J. abnorm. soc. Psychol.*, **68**, 533-539.

Zanna, M. P., & Cooper, J. (1974) Dissonance and the pill: an attributional approach to studying the arousal properties of dissonance. *J. P. S. P.*, **29**, 703-709.